
魔法少女リリカルなのは ~輝きの翼~

紅の牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは～輝きの翼～

【Zコード】

Z3349BA

【作者名】

紅の牙

【あらすじ】

輝く翼をもつ少年は、その翼で何を守るために拳を剣振うのか。
この小説は、魔法少女リリカルなのは～勇気の翼をもつもの～の改
変版です。駄文ですが、よろしくお願いします

プロローグ

俺は夢を見ていた、金色の髪をし、紅い瞳の少女の夢を

（何で、お前はそんなに悲しい目をしてるんだ？）

俺は聞いた。だが、少女は何も答えず、ただ黙っているだけ。そして、少女が何かを言おうとしたとき。田覚ましが鳴り、俺は目を覚ました

「…………また…………」の夢か。今月に入つて何回目だ、この夢を見るのは？」

俺はベットから降りると、カーテンを開き、窓を開けた。開けると、風が流れてきた

「…………何かやな予感がするな」

俺がそう呟くと

「兄ちゃん、おはよっ」

弟のタカトが部屋に入ってきた

「おはよっ、タカト」

「お母さんが、『飯出来たから降りて来いって』

「解った、今行く

タカトが下に降りると、俺は着替え、あるものをポケットに入れリビングに向かった。この日から戦いが始まるなんて、俺は思つてみなかつた

大 side

俺がリビングに降りてくると、既に全員がそろっていた

「おはよう、大。珍しいな、お前が遅く起きるなんて」

ソファに座り、新聞を読んでいる父さんがそつまつた

「俺もさう思つよ。母さん、姉ちゃん、おはよう」

「おはよう、大」

俺達は席に着き、

「おはようございます」

朝食を食べ始めた

「……そう言えば、僕。不思議な夢を見たんだ」

「夢?」

食べている途中、タカトが話始めた

「うん。ある男の子が森にいてね、変な怪物と戦ったんだけど、負けちゃったんだ。つで、助けを呼ぶといひで田が覚めたんだ」

「へえ～～」

「そう言えば、兄さんはどんな夢を見たの？」

タカトが聞いてきたので

「前に話した内容と同じわ」

「前にって、金髪の少女の夢か？」

俺の話を聞いて、父さんが質問した

「うそ、この娘よく見るんだよな～・・・何でだらう～」

「案外、運命の出会いの前兆じゃない？」

「まさか」

姉ちゃんに言われ、俺はあり得ないと言つた

「ほら、一人とも早く食べないと、遅刻するよ」

「おっと、そうだったな」

母さんに言われ、俺は止めていた箸を再び動かした

朝食を食べ終えた、俺とタカトは家を出て、バス停に向かった。バスが来、乗り席を探していると

「タカト君、大先輩こっちです」

奥から声が聞こえた。見ると、3人の少女が手を振っていた

「おはよう、アリサちゃん、すずかちゃん、なのはちゃん」

「よし、アリサちゃん、すずかちゃん、なのはちゃん」

俺とタカトは奥に向かった

「おはよう、おまこます、大先輩、タカト君」

「おはよう、おまかわ」

タカトはなのはちゃんの隣に座り、顔を少し赤くしながら話していた、よく見るとなのはちゃんもそうだった

「（青春だね～）」

俺はそれを見ながら、誰にも気づかれないように笑った

学校に着くと、俺達は別れ、俺は自分の教室に向かった

「つづーす」

俺が教室にはいると

「よう大、おはよっ」

「うよ、タイキ」

親友のタイキが俺に話しかけてきた

「悪いんだけどよ、宿題見せてくれないか?」

「またか、少しは自分でやったひどいだ

「やつてんただべよ、色々と頼まれて時間が取れなくてな

「……はあー、お前のまつとけないは尋常じやないからな」

俺はため息をついた

「ははははは

俺はタイキに宿題の書かれたノートを渡し、席に着いた

そして、放課後

俺はタイキと途中まで一緒に帰り、家に帰ってきた

「ただいま」

「お帰り、大」

「父さん？珍しいね、こんな時間にいるなんて。・・・なんかあつたの？」

俺は父さんに聞いた

「ちょっと、厄介」とが起きてな。母さんと一緒に行かないといけないんだ」

「そつか

俺は納得した。俺の家は全員が魔道士である。父さんは時空管理局と呼ばれる組織の執務管で母さんはその補佐。姉ちゃんもある執務管の補佐である

「暫く家を空けるが、大丈夫か？」

「まあ、何とかなるよ」

俺は父さんにそつとつた

「大、お前にこれを渡しておく」

父さんは俺に機械を渡した

「・・・」これは？

「タカトのデバイスだ。本当は俺から渡したかったんだが、そつも言つてられないからな」

「……解つた。俺から渡しておくれよ」

「済まない。じゃあ、行つてくわ」

「行つてらっしゃい」

行つして、父さんは任務に向かつた。暫くするとタカト帰つてき、俺は父さんと母さんが出張で家から離れると言つておいた（タカトにはまだ魔法の事は教えていないため）

そして、その日の夜遅く、部屋でのんびりしてると

「（助けて）」

念話が届いた

「……今のは念話、一体誰が？」

俺が不思議に思つていると、ドアが勢いよく開き、閉まる音が聞こえた

「……まさか、タカトの奴今の念話を聞き取つたのかー？」

俺は自分のデバイスと父さんから渡されたデバイスを取り、急いでタカトの後を追つた

「シャイン、起きる

俺は走っている途中、相棒のシャインニング・ウイニングに声をかけた

『どうしたんだ、マスター？』

「厄介」とが起きた。一気に終わらせるべき

『・・・』解

『セットアップ』

俺はB-を纏うと、空に飛翔した

「あそこか

俺は魔力反応が起っている場所に近づくと、桜色の柱が上がった

「何だ！？』

『この魔力量、AAA+はあるぞ』

「タクト並だと！？』

田を凝らし、よく見ると、見知った顔があった

「・・・まさか、なのはちゃんと魔道士としての資質があつたなんてな

俺は知り合いの隠れた才能に驚いていた

『どうするんだ?』

「まずは様子見だ。危なくなったら、援護するぞ」

俺はその場で止まり、なのはちゃんの戦闘を見始めた。驚いているのか、動きが良くなぐ、祖に隙をついて、怪物が攻撃してきた

「シャイン」

『了解』

俺は左手の掌を怪物に向け

「トライテントリボルバー！」

高速、高威力の魔力弾を3発撃ち、怪物を撃ち抜いた。そして、誰かの助言が入り、なのはちゃんは呪文を唱え、何かを封印した

「……お前を主に渡せなくて悪かつたな、デューク」

俺はタカトのデバイスに謝った

『気にしないでくれ、いずれ主に渡してくれれば問題ない』

「……そうか」

俺はその場から離れ、家に向かい、タカトが帰つて来るのを待つた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3349ba/>

魔法少女リリカルなのは ~輝きの翼~

2012年1月8日18時46分発行